

インフルエンザで入院した患者の 12%に急性心臓血管イベント

例年インフルエンザの流行期には、インフルエンザによる急性心臓血管イベントの合併がみられる。本研究では、検査でインフルエンザが確認された入院患者における急性心不全および急性虚血性心疾患の危険因子について横断研究を実施し検討した。

米国の 2010～2018 年にインフルエンザによって入院した患者のうち、診療記録のデータおよび ICD(国際疾病分類)コードの得られた 80,261 例(年齢中央値 69 歳)が対象となった。結果、11.7%が急性心臓血管イベントを合併し、最多は急性心不全(6.2%)と急性虚血性心疾患(5.7%)であった。高齢、喫煙、基礎疾患としての心臓血管病、糖尿病、腎臓病が急性心不全と急性虚血性心疾患のリスク上昇と有意な関連がみられた。

したがって、インフルエンザ患者において、およそ 12%が心臓血管イベントを合併していることが明らかとなった。インフルエンザによる急性心臓血管イベントの合併を予防するため、基礎疾患のある患者にはとくにインフルエンザワクチンの接種率を高める必要がある。

出典:Annals of Internal Medicine. 2020 Oct 20; 173(8): 605-613.